
シャッターチャンス協会！

石田多紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャッターチャンス協会！

【Z-コード】

Z0468B

【作者名】

石田多紀

【あらすじ】

バイト先の喫茶店はなんだかよくわからない副業をやつしている。
もしかして法律に触れるんではと思って、あたしはやめることを決
意した。のに……。

シャッターチャンス協会！

石田 多紀

悲愴な覚悟を固めて、あたしは喫茶さくらの前に立つた。

スマートガラスにエッチングで『さくら』と記されたその下、小さな金のプレートに記された、『シャッターチャンス協会』という文字。この文字をもう一度にらみつけてから、取っ手に手をかけた。からり……と涼しげな音を立てて、ドアが開く。

「いらっしゃいませ……、おや、志恒ちゃん

「ど、どうも、お久しぶりです」

中にはいたのは、腰に届く長髪を、背中で束ねた超美青年。さくらで主に調理を担当している大神主匡さんだ。

「本当に、風邪でも引きましたか、じいじ田ばかり」

「いえあの、ちょっと、事情が……、前期試験もそろそろですし、おじおじしながら、辺りをきょろきょろと見回す。今日の訪問理由を鑑みると、あまり剣呑な連中には会いたくない。

「今日はまだ、匡さんだけですか？」

「そうですね。マリも姫御前も来るという連絡は入っているんですねが、まだのようですね」

「これを聞いて、あたしは思わずほおつと息をついた。

マリ先輩こと相模真理さんと姫御前・川村比田子さんには、できることなら会わずに全てを終わらせててしまいたい。特にマリ先輩がいるといふと、まともな話しさは殆どできやあしない。

「あの、匡さん、それで杉村さんは」

「杉村さんは今日は来ません。協会の方の仕事で人に会うとか言つ

てましたね

「……あ、そうですか……」

こここのオーナーは、杉村優作さんといつまだ三十九歳にそこにして見えない人だ。大学生の時に発明したというコンピューターの基本構造上のなんだかんだかの特許を取り、最初に就職したところで開発した業務用基本OSのパテントをちゃっかり自分名義にして、それからかなりのお金を得たといつ。さくらには数えるほどしか顔を出さず、実質的にここを仕切つているのは匡さんだといえ、やめる話しさやはり杉村さんにするべきだらう。

やれやれ。そろそろ月末だし、今日は来てるんじゃないかと踏んだんだけど。

「Hプロン、洗つてありますから。奥のロッカーですよ」

「どうもすみません」

調理場の横にあるオフィスプレートのかかったドアは、その奥に約六畳の空間を持つ本当の意味でのオフィスである。ただし、『さくら』のオフィスではない。

几帳面な匡さんがきちんとアイロンまでかけてくれた紺色のHプロンを締めながら、あたしはため息をついた。

そう。さくらのバイトが問題なのではないのだ。

さくらのバイトは、時間は融通が利くし、時給はそこそこだし、さほど忙しくもない。一緒に働く匡さんは、何せ超のつく美青年で、見ているだけでも楽しい。穏やかな物腰で丁寧に話す、いわゆるいい人だし、杉村さんだってちゃんとこつちを尊重してくれる。

だが。

だが、『シャッターチャンス協会』がらみとなると、話しさ別である。

この、カメラ業界とは何の関係もない、一体何をやつているのかさっぱり分からぬ（つまりその目的が）協会がからむと、この二人プラスマリ先輩やら姫御前やら、ほかにも暴走族女とかその手下の知力くんとか、傍若無人の集団と化すのだ。先ほどのオフィスも、

このシャッターチャンス協会のものだし、そういうことを言い出せば、『さくら』自体が、シャッターチャンス協会のカムフラージュ機関でしかないのではないかと思える節さえある。

カムフラージュ。

つまりシャッターチャンス協会とは、カムフラージュが必要となるような、怪しげなものなのだ。

なんだかよく分からぬけれど、一日中人の後をつけ回すとか、おめでとう商法まがいの方法で人を呼び出すとか、揚げ句の果てには、怪しげな宗教法人のふりをして人をだますということまでしているのである。しかも、この最後の時には、知らぬ事とはいえ、あたしも手を貸してしまった。かかつてきたそれ関係の電話に、インチキと知っている法人名を名乗つたのである。

こんな事を続けていたなら、いつかきっと、手が後ろに回つてしまふ。そうじやなくとも、あたしはお天道様の下を歩けなくなってしまうだろう。そう考えるようになり、結局はさくら自体を辞めてしまおうと考えたのである。

あたしの考えは、間違つていないはずだ。

しかしそのやつとの決心も、今日は果たせないのだ。

そう思つと、なんだか全身の力が抜けたような気になつた。

あーあ、あんなに力入れてきたのにな。

テーブルを拭きながら、もう何度目になるか分からなくなつた溜め息を、また吐いた。

「あれ。今日は一人つきりですか？」

そういいながら、滝知力くんが入ってきた。知力くんは、シャッターチャンス協会最年少の高校生で、とても真面目そうに見えるのに暴走族の一員なのだ。

「やだなあ、白夜は暴走族じゃないですよ、志恒さん」

知力くんはよくそつ言つが、その頭である池後佐和乃は、どう見ても不良だ。

「あんたね、同じ年の大学生つかまえて、不良はないでしょう、不良は」

「だつてあんた、どこをどうとつても、不良じゃないの」「知力くんの後ろから、革ジャンのジッパーを開けながら入つてきました佐和乃に、あたしは冷たい声音で言つた。

「夜中にバイク乗つてるだけじゃないか。マリは？」

最後の問は、匡さんに向けられたものだ。

「来るらしいですけどね。連絡はありましたから」「例の件、準備の方はいいの？」

「ええ。充分に」

あたしには分からぬことを、一人は話しだした。

多分、シャツターチャンス協会の仕事のことだ。やれやれとカウンターに戻つたあたしに、その前に座つた知力くんが、肩をすくめながら、アイスコーヒーを注文してきた。

「姫御前が来ていないうんなら、僕、帰ろうかな」「比呂子さんに用事だつたの？」

意外だつたので、ちょっと吃驚してあたしは聞いた。知力くんは、匡さんやマリ先輩、それに当然ながら佐和乃とはよく喋つているけれど、御大である杉村さんや姫御前と話している姿は、滅多に見たことがない。

「あ、やだなあ、そりや誤解だよ志恒さん。だつて僕が姫御と知り合つたのだつて、もともとは姫御前が仲介なんだよ」「え、そうだつたの？」

「そう。協会の仕事の関係で」

差し出したアイスコーヒーにガムシロップをたっぷりと注ぎながら、知力くんは言つた。

「今日はさ、姫御前に相談したいことがあつたんだよね」「へえ、」

普段なら協会関係のこと、これ以上の口出しはしない。これ以上の口出しをして、一時的な好奇心を満足させたならば、それを上

回るかなりの代償を払わなければならないことを、あたしは充分学習していたのだ。

だが、あたしは続きを言った。それが自分の落とし穴を掘る合図になるとは、露ほどにも考えずに。

「へえ、何を相談するつもりだったの？」

珍しく好奇心を表出したあたしに、知力くんはちらりと匡さんたちの方を見てから、声をひそめた。

「実は僕、シャッターチャンス協会を、辞めようかと思つてるんだ」

「だいたいあの人たちは、人をなんだと思うてこるのか、さっぱり分からぬ」

「そうよ、そうよね」

「僕のことなんか、せいぜいパシリ程度にしか考えてないんだ。何を聞いたって、まともに答えちゃくれないし、マリなんか、僕をおもちゃにしている！」

場所は変わつて近くのハンバーガーショップ。

あたしと知力くんは、一番安いハンバーガーとポテトとコーラのセットだけで、もう一時間も愚痴といつていい会話を繰り返していた。

あたしはさくらにバイトのウエイレスとして入つたのだが、知力くんは、単に比呂子さんの隣に住んでいたという縁だけで、シャッターチャンス協会に関わらされたのだというのだ。

「そりやあ確かに、姐御のこと紹介してくれた事には感謝してるけどさ、それとこれとは話しが別だよなあ。こんな、ヤクザまがいの事させるんだつたら、あのまま道を踏み外させておいてくれた方が、将来立派に更生するチャンスもあつた！」

「ヤクザまがいって……」

だんだん激高していく知力くんに、さすがのあたしもついていけないものを感じる。どうやら知力くんは、何のためにやらされるのかということは説明されても、何で自分がするのかという辺りに理

不尽なものを感じながら、言われた事をしてきたりし。中には、とても口に出せないような、はつきり犯罪行為であろう事も含まれていたのだという。『青春の落とし穴』に墳つてグレかけていたところを救つてくれたのは、『隣のお姉さん』であつた比呂子さんで、それについてはまあ感謝しているが、結局はそのままグレるわけにはいかない状況になつてしまつただけだと、知力くんは怒つているのだ。

「グレるにグレられない状況つて、何？」

ちょっと不安になつて口を挟むが、知力くんはとてもそれに答えられるような感じではなかつた。

「だからさ、もうこの際シャッターチャンス協会なんかとは縁を切つて、僕はちゃんと普通の、道を歩いている時に後ろを気にしないでもいい生活に戻りたいんだ！！」

「後ろを気にする生活つて、一体、何？」

「ああ、もう、本当に、シャッターチャンス協会つて何なのよ！完全に置いていかれた格好になりながら、あたしはおろおろと、一人盛り上がつてしまつた知力くんに強いられる乾杯を繰り返す。

「あ、いたいた。お前ら何やつてんだよ、まつたく」

「マリ先輩」

その時、噂のマリ先輩こと相模真理さんが、呆れた顔でやつてきた。

189センチ、推定80キロ。とてもいい身体をした、一見さわやかな酪農青年。その実はH大（仮名）でドイツ文学をやつている合氣道の師範代という、よくわかんない経歴の大学生である。

「おうしーの、おまえ前期試験でさくらんでたんだつて？ まつたく、テスト！」ときにびびつて、これから長い人生なんとする

「……はあ

少し上向いたまま人を見下す、特技といつていい格好で、堂々とそういう放つ。

「それにおまえらな、コーラ入つた紙コップで乾杯つて、何やつて

んだよ、情けない。まあいいや、とにかく帰るぞ。ちょっと俺たち
出るからな、さくら無人になる

「え?」

「え、じゃない。だつて匡ガツコ行くだり?」

「あら、もうそんな時間ですか」

匡さんは定時制高校生で、六時から学校がある。あたしは土曜日
休みだけれど、高校生はそうはいかないらしい。もともとあたしが
さくらでバイトすることになったのも、匡さんが六時から三時間ほど
いなくなるからなのだ。まあ実際には、六時前から働くことにな
つていいのだが。

「……ちょっと出るつて、ビリで行くつもりなんだ」

知力くんが反抗する。

「どこに行くかだづ? お前にそんな事を知る権利はない。黙つ
て俺についてこい」

「また協会の仕事? 僕もうやなんだ、訳の分からないうことをやら
されるのは」

「誰がいつ、訳のわからなうことやらせたよ」

「いつもそうじゃないか。説明つたつて、あんな手抜きで。あれ
じやあ中国語の家電品の取扱説明書の方が、漢字で想像できる分、
まだ分かり良い!」

「知力、てめ、そんなに可愛がられたいのか」

これで知力くんは一気に押し黙った。ちなみに可愛がるつてのは
言葉通りの意味で、決して悪い暴走族女が言つ「野郎ども、ちょつ
と可愛がつてやんな」と同じ意味ではない。

「……マリ先輩」

「なんだしーの」

やけくそになつたわけではないけれど、やけになりかかっていた
のは確かだ。だめ元で、あたしは言つた。

「シャッターチャンス協会つて、なんですか」

けれどやつぱりマリ先輩は、ゆっくりと人差し指を手元に持つて

いくと、思いきりあつかんべえをして、言つた。

「おじえてやんない」

留守宅のセキュリを預かるとき、メニューは飲み物とレンジでチンするだけの簡単なものとなり、あたしの仕事はほとんどなくなる。「じゃあよろしくお願ひします」と言い置いて匡さんはいなくななり、あたしは一人でカウンターの中に座つた。知力くんはすぐに帰つてくると言い残し、抵抗空しくマリ先輩に抱えられていつてしまつた。

「はあ」

お客様も来ないので、あたしはぼおつとしていた。
シャッターチャンス協会つて、一体何なんだろ。結局はそれが知りたいだけなんだな、あたしは。さくらに入つてから、もう半年になる。

その間に、多分協会がらみのよく分からぬ事をいろいろやらされて、あたしはすっかり仲間のような気がしていた。だけど、話しがだんだん怪しくなつて来るにつれて、実はなんにも知らないんだつて事が、はつきりしてきた。誰も、なんにも教えちゃくれない。匡さんはいろんな事を易しく説明してくれるけれど、肝心なことは何にも話してはくれないし、マリ先輩なんか、端からあたしを相手にしてない。

「協会の正体さえ分かればなあ。別に辞めなくとも……、あ、いらっしゃいませ」

からら、とドアの開く音がしたので、条件反射で愛想良く挨拶したが、入ってきたのはマリ先輩だった。

「なんだ。マリ先輩」

心底がっかりした口調を、必要以上に表して、あたしはため息をついた。いつもならなんだかんだと難癖をつけてくるマリ先輩だが、そんなどころではなかつたらしい。今まで見たこともないくらい真剣な表情で店内を見回すと、あたしに向き直つた。

「しーの、知力が戻つてこなかつたか」

「え、知力くん？ いいえ、みんないなくなつてから、お密さんも来ないですよ」

「密？ 密なんかどうだつて……。じゃ誰かから連絡は」「いえ別に。……何かあつたんですか？」

さすがに不審に思つた。

真剣なマリ先輩といつ、それだけでも非日常な事に加えて、落ちつかなげにイライラと、口元に拳を当てるて考え込んでいるのだ。

「そうだ、しーの、匡のケータイの番号を教えて」

「え、匡さんの携帯ですか？」

驚いた。

マリ先輩は携帯電話もアドレス帳も持つてないので、人の電話番号が知りたくなると、よくさくらに電話してくる。さくらの番号だけは暗記しているからだ。つまりあたしが104の代わりをさせられている。

よくかける先ナンバーワンは、佐和乃の住んでいる短大の女子寮で、これはあたしが代理でかけさせられることが多い。次が杉村さんのマンションで、この他を聞かれたことはない。杉村さんと匡さんは同居（というか、匡さんが住み込みで働いているというか）している。さくらにいなればそこにいるという感じで、この二人が同時に両方にいす、しかもマリ先輩と一緒にいるという事態はまずないので、多分シャッターチャンス協会の仕事の関係で持たされているのであらう匡さんの携帯に、マリ先輩が電話をかけたことはない。その上今はまだ、匡さんは学校の真っ最中のはずである。

「いいんですけど、匡さん授業中だと思いますよ」

「授業なんかどうだつていい。さっさと帰つてこいと叫つてくれ」

ドスの利いた声で叫つので、少し怖い感じがした。

あたしは黙つて、店の電話から匡さんの番号を廻した。

「……ねえ、何かあつたんでしょう、マリ先輩」

呼び出し音が聞こえた時点で、もう一度聞いた。

少し怒つたような顔でマリ先輩はあたしを見つめ、いつ叫つた。

「知力が、もつていかれた」

「詳しく述べてもらいましょうか」

さくらのドアに準備中の札を出し、あたしは一人の後ろに腰を下ろした。

電話をすると、すぐに匡さんは事態を把握し、そして吹っ飛びで帰ってきた。愛用のママチャリに鍵をかけるのもどかしい様子で中に入ってきたのだ。

「だから、例の件でサテンで待つてたら、相手がやつてきて、知力がその後追つて、と思つたら、車に乗せられた」

「……」

珍しい姿といえた。

いつも自信満々で、大上段からわはははは、が基本姿勢のマリ先輩が、穏和で温厚、柔和な笑顔と丁寧な物腰が（そして当然、美貌も）売りの匡さんの前で、ちいいさくなつていた。

「つまりあなた、失敗したと、そういう事ですね？」

「お前そんな、あからさまな言い方しなくてもいいだろ？が

「あからさまではない言い方をすれば、事態が收拾するとでも？」

「ちょっと、こわい。」

普段温厚なだけに、こう冷たい雰囲気を醸し出されると、なんだかいたたまれない氣分にもなる。なまじ綺麗な顔をしているだけに、匡さんの怒りは、冗談ではごまかせない迫力を持っていた。

「大体あのおっさんの見張りはお前の役目だろうが、それを学校に行くからできないって言うから、それでは代わりにやつてあげましょ？がと、いわば親切心で、」

「ああそうですか、だからいい加減な仕事をしても責任はないと、そう言いたいんですね！？」

「ちょっと、ちょっとちょっと、止めてください！」

ついに見かねて、あたしは口を挟んでしまった。もう、今はそんな事を言っている場合ではないだろうに。

「今はそんな事を言つていい場合ではないんじゃないですか？ほら、マリ先輩は、失敗したのは間違えないんだし、匡さんも、そんなに責めたって、状況に変わりはないんだし、もっと建設的なことを話し合いませんか！？」

思わずわめき立てたあたしを、一人は吃驚したように見つめた。まあ、そうだろうな。今まで協会内のものめ事には、いつさい関知せずというスタンスを取つてきたし。だけど、事は知力くんに関わることである。まさか知力くんが協会から抜けようと考えていたとは知らなかつたが、知つてしまつた以上は、同志だ。知らんぷりはできない、気がする。

「……志恒ちゃんの言つとおりですね。もっと、建設的なことを話しましょ！」

小さく咳払いをして、匡さんが言つた。

「車の特徴は、覚えているんですか？」

「白のワゴン、横腹に何かアルファベットが書いてあつた。そんなに大きな車じやなくて……、わー——————！」

「落ち着いてください志恒ちゃん、ここで椅子を振り上げてもなんにもなりません！」

あまりに情けない物言つて、思わずあたしはマリ先輩に向かつて、椅子をぶつけるところだつたのだ。

「建設的な話し、建設的な話しですよー！」

「だつて、せんつせん、お話にならないじゃないですか！　アウトドアブームの昨今、白のワゴンなんて、一体何万台札幌市内にあると思つてるんです！」

「いや、だけど関係者の持つてる車調べれば、絞られるぞ、多分」「誰がどうやつて調べるんですか？」

マリ先輩はうつとつまる。

「さうですね。杉村さんも姫御前も、頼りにはできませんよ」「匡さんも、冷たい口調で言つ。

「佐和乃に話して……」

「佐和乃のネットワークは使えません。ナンバーがわからないんじや、手配のしようがないでしょ?」

「それじゃ俺たちで何とか相手方に忍び込んで、」

「俺たちって、あたしは知りませんからね、あたしはシャッターチヤンス協会とは、何の関係もないんですから」

「どうでも犯罪の匂いが感じられる事をしようとするのでは、逃げるしかない。マリ先輩はちらりとあたしを見て、それから小さくため息をついた。

「やっぱり、杉村さんに報告するしかないだろ? 隠したまんまじや、機動力もそがれるし、それにいすれば絶対にばれることだし」「なにも私は、あなたの失敗を隠さんとして、杉村さんに報告していないのではありません。連絡が、とれないんですよ」

その時、さくらの電話が鳴った。

当然の事として、あたしが立った。もともとあたしは、『ウロイトレーストとか、電話番とか』に雇われたのだ。だが一瞬早く、匡さんが受話器を取つた。

「はいもしもし、さくらです……、はい……」

真剣な顔でこちらに振り返り、受話器を指さして頷く。

マリ先輩が、すぐにその側に寄つた。

「ええ、わかつています。はい、そうです。いえ、しかしそれはできません……、わ、わかりました、誰もそんな事は言つてないじやないですか、いえ、ですからそういう意味ではないと、」

「なにいつてんだ、匡、早く話しつけろ!」

「それで……、そんな、そんな一方的な! あつ、もしもし? もしもし!」

匡さんが受話器に叫び、あたしとマリ先輩は息を詰めて見守った。

「……きました」

「それで、なんだって! ? 知力持つてつた奴からなんだろ! あたしも思わずそばに寄る。」

「いえ、それが……」

匡さんはちらりとあたしを見て、口元もつた。

「ええと、その、協会の仕事に関わる」とですの……

「つまり、あたし邪魔だつて事ですか

むつとした。

確かに協会の仕事に関わるのは、いやだ。だけど、こんな時にそんなこと言わなくてよいにじやないか。

「そうだな、危ないことになつても困るしな。しーのはこれ以上は関わらない方がいいな」

「わかりました。じゃ、あたし、奥にいますから……」

はつきり怒つて立ち上がり、あたしは奥のオフィスのドアをわざと音を立てて閉めこんだ。

あたしはかなり怒つていたと思つ。もつ、まとまつた考えができなくなつていたのだから。よくよく考えたならば、何一つとして、あの一人を恨む理由はないのだ。あたしがずっと、危ない事には関わりたくないと言つてたんだし、シャッターチャンス協会とは関係ないんだとも言い続けていた。だからあの一人があたしは関係ないというのはもつとも言える。だけど、こんな時に言い出さなくたつて、いいじゃないか。いつだって、否応なしに巻き込んでるくせに、あたしがその気になつたら邪魔だつて、それはないと思つ。「なによなによ、なんでそんなに勝手な事ばっかりいうのよね。あたしのこと、なんだと思ってんのよ、あの一人は。そりゃさ、あたしはシャッターチャンス協会とはこつさい関わりないわよ、でもだからつて、」

「しのぶちゃん?」

その時、ドアをとんとんと叩く音がして、匡さんが細くドアを開けた。

「ノックには応えてから入つてきてください……」

完全に八つ当たりである。

たいして気にした様子もなく匡さんはドアを大きく開けた。

「すみません。ちょっと、出ますので、電話番をお願いできますか」「なんですか今更。どうせあたしは電話番ですし」

「それで、携帯の方に廻してほしいんです。伝言を聞いて」

「え?」

いつもとは違う依頼に、一瞬怒りも引っ込む。

いつもは、協会関係の電話は、杉村さんの携帯の番号を伝えて終わりなのだ。

「今回はそういうわけには行きません。できればおの一方には知られたくないかもしれませんしね。お願いできますか?」

「え、ええ、それはもちろん」

「にこり」と、匡さんは微笑み、ドアを大きく開いてあたしを外に誘導した。あたしは立ち上がり、なんだか肩すかしを喰った気分で店の方に戻った。マリ先輩はすでに出かける用意を済ませ、いつものようにコンサドーレのキャップを逆に被つて立っていた。

「早くしや、匡」「匡」

「ええ、それじゃよろしくお願ひしますね、志恒ちゃん」

匡さんの言葉に、機嫌を直したとき、マリ先輩が一言、「余計な事するなよ」と言った。あたしはその言葉に一度、ギレした。

「わかつてます!…」

もう、さつさと行つてしまえ!

そういう気分で怒鳴った。

一時間半が過ぎた。

別になんの電話もない。

バイトの時間はとっくに終わっている。

もう、帰つてしまつてもいいんじゃないだろうか。

だって、どうせあたしなんかなんの頼りにもされていないんだし、別にシャツターチャンス協会の一員でもないんだし。でも、鍵かけなくちゃならないし、そうするとそれから、終わらにななくちゃならないし。

ぐずぐずと理由をつけてやつぱり居続けたのは、知力くんが心配だつたからだ。知力くんが持つてかれたつて、はつきりいつて誘拐じゃないんだろうか。

「 ゆうかい！？」

自分で考えついて、その考えに驚いて声が出た。

そうだ。持つてかれたつて言葉に、何となくだまされそつたけど、それつてつまり、誘拐つて事じやないか。こんな大変な事、杉村さんに知らせなくていいんだろうか。姫御前つて、知力くんの昔つからの知り合いだつて言つていた。そうだ、それに佐和乃！ 知力くんの実質的にボスであるう佐和乃に、知らせなくていいのか。リリリリ、と電話の音がして、思わず飛び上がつた。

電話、電話である。

「 はいもしもし、さくらです！」

『 な、なに、どうかしたのかい、そんなに勢いづいて』

佐和乃である！

「 佐和乃！？ 佐和乃なのね！？」

『 そつだつて』

妙にのんきな声なのが気に障る。

「 あんたなに落ちついてんのよ！ 知力くんのこと、聞いてないの？」

『 知力？ 知力がどうかしたのかい？ マリいる？』

「 マリ先輩は知力くん探しに行つたわ」

『 探しに？ どういう意味だ？』

やつと、佐和乃是真剣味の感じられる声を出した。勢いづいて、あたしは今までの経過を話した。

「 で、今あたしは電話番してるの」

『 ……それは、あぶないな』

ところが佐和乃是、思いがけないことを言い出したのだ。

「 え？」

『 危ないよ、それは。わかつた、今からあたし行くから、電話番を

代わる「」

「ええ！？」

なんであんたまで、あの二人と同じ事を言つのだ！？

『だつて本当に危ないぞ。あんた、危ない日には遭いたくないって言つてたじやないか、しーの』

「そんなの、だつて、こんな時にそんなのするい！ あたしだつて知力くんの心配してるんだよ！？』

『そりやわかるけどさ、でもあんたには、結局関係ないんだし』

「！』

カツと来た。

言葉に詰まつた。

『だから代わるよ、ちよつと、もしもし、もしもし？』

そして一方的に電話を切つた。

なによ、なんだというのよ。

みんなしてそうやつて、あたしの事を関係ない関係ないつて、部外者扱いする。

「関係ないなら巻き込まないでよー！」今まで巻き込んだいで、関係ないつて言わないでよ！』

「あらあら、もう準備中つて、どうしたの？』

「姫御前！』

わめき散らして少しだけすつきりしたとき、姫御前が入つてきた。クリーム色のスーツに黒い革のショルダーバックで、すっかりキヤリアウーマンに見える。それは、とつても頼りがいのある姿に見えて、あたしは思わず縋りついた。

「姫御前！』

「どうしたの、志恒ちゃん？』

「あああ、姫御前、なんていいタイミングで、本当に、いいタイミングで』

「どうしたの、何かあつたの？ 国くんや、マリくんは？』

「姫御前、あのですね、実は知力くんが、』

「よけいなことを喋るな、しーのー！」

まさにその瞬間、あたしが喋ろうとしたその瞬間に、マリ先輩と匡さんが飛び込んできた。

「しーの、喋るなっていつただろう、姫御前や杉村さんはー。」

「だつてだつて、知力くん、だつて誘拐されたんですよー！」

「誘拐なんかじゃない！」

「なに？ 誘拐ってなんの事なの？」

「誘拐じゃないですか！ 車に乗せられて、連れて行かれたんでしょー！」

「あれは拉致って言つんですよ」

「拉致？ え？」

「どつちだつていいでしょ、そんな事？！ とにかく知力くんが連れ去られたことには変わりないじゃないですか！」

「だけどおまえには関係のないこつた！」

「また！ また関係ないって言つた！」

どうして？ あたしがシャッターチャンス協会に入るつて言わないうから！？ だけどあなた達はいつだって、あたしを引っ張り込んでいたじやないか！ あんな事をさせて、それでも関係ないって、あたしは関係ないって言つわけ！？

あたしの居場所はここにはないつて言つわけ！！

「だつておまえは、シャッターチャンス協会の人間じゃないだろう！」

「それとも、関係者だという事かしら？」

姫御前がそう問い合わせ、ほとんど売り言葉に買い言葉で、あたしははつきりと、こう言つた。

「ええ、そうですー！」

世の中には取り返しのつかない」とがある。

冷静になつた今、つぐづぐとやつと思つ。

「ええ、そうですー！」

あの時あたしがそう叫んだ途端である。

「今、録つたわね」ニヤリと、姫御前が言い、「ええ、はつきりと」と匡さんが答えた。なんだか、状況が、変……？

「知力くん、戻ってきていいわよ」

手にした携帯に向かつて姫御前はそう言い、呆気にとられて思考の止まっていたあたしに向かつて、ニッコリと微笑みかけた。

「さあ、これで志恒ちゃんも、はつきりと、シャッターチャンス協会の一員よ。これからもよろしくね」

「……あ、あ、あ……？！」

匡さんが、ジーンズの後ろポケットから、マイクのついたウォータマンを取り出した。

「だまして申し訳なかつたですけれど、志恒ちゃん、」

「俺たちを恨むなよ。脚本書いたのは姫御前と杉村さんだし、最初に乗つたのは、知力だからな」

やつと、頭が働いてきた。

つまり、どういうこと？ 匡さんは今、だまして悪かつたつて、言つた。てことは、あたし、だまされていたつて事なのね？

「……どういう事ですか。こんな、知力くんが誘拐されたなんて、こんな大事を仕組んで、一体なにを考えて……」

「だつて志恒ちゃん、関係ない関係ないって言い張つて、ちつともシャッターチャンス協会に入つてくれようとしないし。それを覆す事件なら、これくらいはしないと、ねえ？」

「なにが、ねえ、ですか！」

なんなの、つまりあたしを協会に入れるためだけに、それだけのために、これだけの大事を仕組んだつていうの！？ あたしの、関係者だと認める言質を取りたいがために、たつたそれだけのためには！

「まあ、それは誤解よ、志恒ちゃん。たつた、なんて事はなくてよ。あなたはそれだけ重要なメンバーと見なされているということ。そういう理解してほしいわ」

「そりそり、物事はいい方に考えないとなあ」「いい事、なんですかあ？」

「この人たちは、本当に、あたしを填めるためだけに、こんな事を仕組んだのだ。あたしに、協会に入るつて言わせたいがために。なんというか、もう、スケールが違うといつうか、常識が違うといふか……。」

「志恒ちゃん、なかなか入るつて言つてくれなかつたじゃない？もう、聞いて氣が氣じやなかつたわ」

「聞いててつて……」

すると匡さんがテーブルの下に手を入れて、マイクを引っ剥がした。

盗聴マイクである。

「…」

「まあ、これがシャッターチャンス協会だといつうことで、『理解いただけますね？』

「…」口づいた匡さん。もう、怒る氣力もなくなつて、あたしは力無く言つしかなかつた。

「……わかりました。もう、なにもいいません」

「…」だつて、なにを言えばいいのだ。

どうせなにを言つたつて、この人たちのいこよびああしらわれるに決まつていて。

「なんにも言ひませんから一つだけ教えて下さい。シャッターチャンス協会って、結局なんなんですか」

「そうねえ。興信所というか、調査会社というか、とりあえずは、そつ言ひごとにしておきましょうか。だつて、これ以上話しちゃつて、明日から志恒ちゃん、来なくなつたら困るから」

その後、あたしの歓迎会を、もつたいなくもやつてくれるという事になり、有り難いんだ過有り難くないんだかの氣分で、参加する事になつた。

もちろん、全く辞める氣なんかない知力くんが佐和乃に伴われて

帰ってきた。杉村さんも出先から戻ってきて、宴はますます盛り上がりといった。

いいんだ。

そのうち絶対、辞めてやる。

はつきりと正体がわからぬいつが、でも気になつてしようがない。

だから、そうだ。

シャツターチャンス協会の眞の姿を暴いた後に、絶対に、辞めてやるんだ！

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0468b/>

シャッターチャンス協会！

2010年10月8日15時12分発行